



“よねやま”から広がる新しい世界 ⑫

モンゴルからやって来た弟



脇町RC
(第2670地区 徳島県)

カウンセラー
北川 一郎 さん

重い腰を上げて引き受けた世話クラブ

ムンゲンホーヤグ・マジグスレン（通称・ホイガ）君が、クラブにやってきたのは2014年4月のこと。脇町ロータリークラブは徳島市内から離れており、それまで米山奨学生に接する機会もほとんどなく、私を含む多くの会員が米山記念奨学事業に関心を持っていませんでした。この年はクラブ創立50周年を迎えることもあり、やや重い腰を上げて世話クラブを引き受けることにしたのです。米山に否定的というより、なんとなく面倒そう、カウンセラーに負担が掛かる、というイメージでした。

頼み事の多いホイガ君

ホイガ君は人なつこい性格で、すぐに会員たちと打ち解け、まるでクラブの一員のように。一方、カウンセラーの私には「家賃の安い家を探すのを手伝ってほしい」とか、いろいろな相談事を持ちかけてきました。こちらも面白い、米山記念奨学会の『カウンセラーハンドブック』を参考にしつつ、あまり深入りしないようにしていました。でも、同じ立場だったら？ 自分の対応は間違っていないか？ と次第に葛藤を覚えるようになりました。

ホイガ君の研究室を訪ねてみると、モンゴルのために日本の医療技術を持ち帰りたいという彼の必死な姿が見えてきました。頼み事は多いが偽りのない人間だと、確信を持つようになり、互いの子どもの年齢が近いこともあって、いつしか本当の弟のように感じ始めました。

留学生は、何もかもが日本とは違う国から来ています。こちらのやり方をぶつけても食い違うだけ。自分の常識

とは異なる考え方を理解し、受け入れる前提でやっていけないといけないのだと思うようになりました。この認識は今、普段の仕事でも役立っています。

秋になり、ホイガ君から「アメリカの学会に行きたいがお金がない」と……。そうはいつでも、こっちもお金がない。クラブの了解を得て、飛行機代を支援しましたが、そこまですることが本当にいいことだったのかどうか。でも、行かせてやりたかった。彼がモンゴル医学界のために頑張っていることを、皆が知っていたからです。

高まってきた米山記念奨学事業への思い

念願の博士号取得後、ホイガ君が一人で高速バスに乗って東北の被災地へ行き、ボランティア活動をしてきたことを後日知りました。「今まで勉強ばかりで何もできなかったから……」と。恩返しなど求めていないのに、彼の真心が気持ちを温かくしてくれます。

カウンセラーを経験し、米山への思いも変わってきました。日本のロータリーの父・米山梅吉さんのことを知るきっかけにもなり、仕事優先で不良会員だった私の出席率もアップしました。クラブも、ホイガ君を受け入れたことで楽しい雰囲気となり、米山への熱意が高まってきました。今後、ホイガ君がモンゴルに帰国したら、みんなでモンゴルへ会いに行こうと計画を立てています。ホイガ君はこれからもずっと、自慢の弟です。



創立50周年式典に出席したホイガ君一家

脇町ロータリークラブの「なんとなく面倒」から始まった米山奨学生の受け入れが、やがてクラブの雰囲気を変え、奨学事業への熱意を高めることになりました。「深入りしないように」していたカウンセラーの北川一郎さんも、自問自答を経て心の変化に気づき、そのことが自身の仕事やロータリー活動に生かされていきます。異国から訪れ一生懸命に学ぼうと努力する留学生たちとの出会いが、何をもたらすのか。その一つの例を、ご紹介します。



米山学友
ムンガンホーヤグ・マジグスレン さん

出身：モンゴル
奨学期間：2014 - 15
学校名：徳島大学大学院

「二度とない」を胸に刻んで

私は、国立モンゴル医科大学（旧モンゴル健康科学大学）付属病院の放射線科医です。モンゴルは医学、特に放射線医学の分野が遅れており、私は、MRI画像診断分野で最先端の機器と技術を持つ日本への留学を夢見ていました。徳島大学で学ぶチャンスを得て、私は脳腫瘍の診断における独自のMRI撮像法を開発し、医学博士号を授与されました。最終口頭試問はすべて日本語で行い、留学生としては異例のチャレンジだと評価をいただきました。日本では常に、「二度とない」という言葉を胸に刻みながら、現在は同大学の特別研究員として、さらなる研究にまい進しています。

ロータリーと日本での学びを生かして

2014年に米山奨学生として採用が決まった後、どんな人がカウンセラーで、どんな話をすればいいか、

とても緊張したことを思い出します。初めて会った日から奨学期間が終わった今も、北川さんに助けられたことがあまりにも多く、とても書き切れません。北川さんだけでなく、脇町ロータリークラブ（RC）の皆さんが私の良き友人となってくださいました。私の子どもたちにも、たくさんの日本の友達ができました。将来、この子たちが一緒になって、世界平和に力を注いでほしいと願っています。

脇町RC創立50周年という大きな節目に奨学生となり、長い歴史の一部になったことが何より光栄です。ロータリークラブという大きな家族の一員となったことで、志を同じくする多くの人間が一心同体となれば、大きなこともやり遂げられると学びました。

帰国後は、日本で学んだことを多くの同僚に伝え、放射線医学の発展に力を尽くします。近い将来、モンゴルの画像診断技術や研究が世界水準に追いつき、世界中の患者の診断・治療に役立つような成果を出せるよう、一生懸命頑張ります。

ロータリー米山記念奨学会事務局

米山記念奨学事業に関するお問い合わせ・ご意見、または「よねやまだより」についてのご意見を、公益財団法人ロータリー米山記念奨学会まで、ぜひお寄せください。

Tel. 03-3434-8681 Fax. 03-3578-8281

Eメール：mail@rotary-yoneyama.or.jp



2年半ぶりの中国米山学友会総会に約140人が出席

中国米山学友会の総会が12月6日、2年半ぶりに上海市で開催されました。中国各地から集まった約120人の学友のほか、その家族や知人、日本からも小沢一彦当会理事長をはじめ米山関係者が駆けつけ、総勢約140人が再会を喜び合いました。主催した上海米山学友会の劉京榕会長は「2002年に8人でスタートした上海の学友会が、今日多くの学友を迎え、強い絆で結ばれていることをうれしく思う。今後10年、20年、30年と、この縁が続くことを願っている」とあいさつ。そのほか、上海の学友で会社組織を立ち上げ、利益の一部を奉仕活動に使う計画や、小学校への支援活動などが報告され、参加者は熱心に耳を傾けました。



多くの学友らが再会を祝して乾杯